

松 山 大 学 論 集
第 32 卷 第 3 号 抜 刷
2 0 2 0 年 8 月 発 行

文化進化をめぐる諸問題

入 江 重 吉

文化進化をめぐる諸問題

入 江 重 吉

はじめに

- 1 生物の主体性とニッチ構築
- 2 文化進化とダーウィン
- 3 文化進化に関する二つのアプローチ
- 4 ヘンリックの文化進化論
- 5 文化進化における負の局面
 - 1) 文化進化といわゆる進歩の問題
 - 2) 文化進化における植民地主義と地球環境問題
 - 3) 文化進化と集団感染症

おわりに

注

参考文献

はじめに

本稿で私は、人間の文化・文明を総体として進化論的観点から考察する。そのさい私は、「文化」という言葉を、広い意味で「文明」という言葉をも含むものとして了解しておく。なお、これら邦語の由来となる、ラテン語の *cultura* と *civilizatio* の語源並びにそれらの差異については周知のこととして、ここでは割愛する¹⁾。

ここでテーマとなる「文化進化」は「生物進化」との対比で問題とされる。もちろん、そうした対比が問題となった当初は、生物進化の流れの中で文化進化が取り上げられた。『世界大百科事典』（「文化進化」の項目）によると、「生物進化の思想は 19 世紀後半の西欧を風靡するにいたったが、大発見時代

以来発見されてきた未開民族、異民族の社会や文化を、進化論的観点から一般化しようという試みがなされた。初期の人類学はこうした文化進化論に基づいていた。文化進化論は、あらゆる文化は低次から高次へ直線的に同じ段階をたどって進化することを文化の諸様相について論じた。イギリスのE. B. タイラーは、宗教がアニミズムに発して多神教にいたり、やがて一神教に発展したと論じ、J. G. フレーザーは呪術→宗教→科学という発展段階を唱えた。アメリカのL. H. モーガンは、社会の発達を、蒙昧、野蛮、文明の3段階に分けて進化論を展開した²⁾

こうした文脈では、進化は進歩と同一視された。しかし、両者は区別されねばならない。進化は必ずしも進歩を意味しないのである。これはすでにダーウィンも確認していたことである。生物進化並びに文化進化において起こることは、多様性の展開である。ただし、生物進化において生物種の多様性が起こるのに対して、文化進化においては、単一の種（人類）による道具や建築物、社会制度など文化の多様性が出現するという違いがある³⁾

そうだとすると、文化進化は生物進化とは断絶したものということもできるのか。実際、ベルクソンなどは「生の跳躍」ということで、生物進化と文化進化の不連続を強調した。しかし、精神的物質的な意味での文化という営みは人類に特有なものであることは確かだとしても、本当に生物進化の中にはその手掛かりさえまったくないものなのか。それとも、文化という営みの根源は生物進化の中に見出せるものなのか。

こういった、生物進化と文化進化の連続と不連続を考える上で、「生物の主体性」「ニッチ構築」というものをさしあたりキーワードとして考えてみたい。

1 生物の主体性とニッチ構築

「主体性の生物学」を標榜する川出由己は、現代の生物学の描く生物像では生きもののありようが理解できない、という。すなわち、川出は、主体としての生物には内的な次元があり、存在の根底に〈心〉や〈感情〉があるというよ

うに考える。例えば大腸菌で、グルコースを栄養源として生きているときに、グルコースが消費し尽くされてしまうと、細胞内に環状アデニル酸という分子がたくさん作られ、それが代謝系に作用して、細胞を飢餓に耐えうる状態に変える。それはあたかも大腸菌が飢えを感じて困窮モードに陥ったかの如くである、という。あるいはアメーバが毒物に触ったときに、偽足を急いで引っ込める、あるいは逆に餌の細菌を蝕知したときにそちらへ偽足を延ばして移動する。そうした反応には細胞の全体制が関与しており、主体がある「気分」を帯びている、おそれとか喜びの原初形のような「状態」にある、という印象を受ける、という。また、単細胞生物に神経細胞に似た機構が見られる。例えばゾウリムシはある温度や塩濃度で培養すると、その条件を記憶する。違う条件に移されると、もとの条件に近いほうへと移動する性質がある、という⁴⁾。

こうした議論は、著名な神経科学者アントニオ・ダマシオにおいても見られる。

ダマシオは従来の進化論における順序 (order) について、新たな視点を持ち込んだ。ヒトの心や知性の進化はふつう脳・神経系の登場を待って初めて可能となった、と考えられている。換言すれば、脳・神経系を持たない生物には心や知性の働きは存在しないということだ。ところがダマシオは、脳・神経系の登場以前にも、心や知性の働きに似た状態が、植物や動物にも、いやもったさかのぼってバクテリアやゾウリムシなどの単細胞生物にも、存在するという⁵⁾。

こうした心や知性に似た働きを司るのが、ダマシオによれば、ホメオスタシスなのである。ただし彼は、「平衡」や「バランス」など恒常性維持を意味するホメオスタシスの概念は通俗的な理解であると批判する。ダマシオによれば、ホメオスタシスとは、無秩序に至ろうとする物質の傾向に対抗し、最も効率的な安定状態によってのみ達成が可能なレベルで秩序を維持しようとするプロセスをいう。しかしこのことは、通俗的と見なされた恒常性維持の意味と矛盾するものではないだろう。というのも、無秩序への傾向に抵抗して秩序を回復す

ることはそれ自体、恒常性の維持に資するものであろうから⁶⁾

ダマシオによれば、細胞は意図や欲求や意思を持つかのごとく振る舞う能力を持ち、実際にそう振る舞ってきた。カンブリア紀（5～4億年前）よりはるか以前の時代に、単細胞生物は自身の統合性を損なう損傷に対して、安定を回復させるための化学的、物理的な防御反応を示すことができた。例えば物理的な反応としては、ひるむ、たじろぐなどといった行動に似た反応を見せていた。そのような反応は、実際には感情表出反応ともいえるもので、のちの進化の過程で、感情として表象されるようになる、一種の行動プログラムと見なすことができる。さらに、単細胞生物が行う感知や反応は、その「個体」に固有の暗黙の視点が備わっていることを前提とする。この能力は主観性の祖先、すなわち、やがて心を備えた生物にはっきりと出現する主観性の萌芽と見なすことができよう⁷⁾

ダマシオは、心や感情や思考の先駆けとなる事象について次のように述べている。すなわち、生命の歴史のほとんどの期間、具体的にいえばおよそ35億年以上のあいだ、さまざまな生物種が周囲の世界を感知してそれに反応する能力を獲得し、知的な社会的行動を示してきた。また、より効率的に生きたり、寿命を延ばしたりする装置や、子孫に繁栄の秘訣を受け渡すことを可能にする生物学的装置が蓄えられてきた。これらの能力や装置はまさに心や感情や思考の先駆けと見なすことができる。イメージや心の世界が出現する条件はおよそ5億年前に現れ始めたが、人間の心はごく最近、おそらくはたった数十万年前に出現したにすぎない⁸⁾

さらに、ファイバーグ／マラットによると、カンブリア爆発と呼ばれる爆発的な動物の多様化、急激な進化が起こった時代（約5.6～5.2億年前のカンブリア紀）にはじめて、動物の複雑な意識、感覚、神経系、行動が進化した、とくに脊椎動物における意識の出現はまず魚類にあり、次に哺乳類と鳥類で起こった、といわれる。ファイバーグによれば、最初の魚類は心の中で感覚イメージを参照することによって、ますます目まぐるしく変化し、複雑かつ危険

になっていくカンブリア紀の世界で、餌を見つけ、攻撃を避け、交配するために、行為の目標を正確に特定の位置へと定められるようになった。ファイバーグもダマシオと同じく、こう強調している、「意識をもたない太古の生物から、原意識のある動物、そして高次の意識を備えた動物まで、意識は進化的に連続している」と⁹⁾

ここまで、生物には言葉の広い意味での主体性があり、いわゆる心や知性の働きに似た原初的な状態が、すでに単細胞生物においても確認されるということに触れてきた。もちろん、そのことが直接に、文化進化に繋がるわけではないが、文化進化は生物進化と断絶したものではないということを少なくとも認め得るのではないだろうか。そしてまた、このことは、進化の連続性を強調したダーウィンの信念を裏書きするものでもあろう。

そもそも、文化進化が生物進化と不連続であると言われるゆえんは、前者において、自らの環境を改変する能力が見られるからであるが、しかし、後者においても、そうした主体的な能力が、下等とも言われる生物に存在するのである。例えば、ミミズである。

オドリン＝スミーは、生物体が自らの環境を改変する能力を「ニッチ構築」(niche construction)と呼び、その事例の一つとしてミミズをあげている。すなわち、ミミズが陸上の環境で生存できるのは、トンネルを掘る、粘液を分泌する、落ち葉を地面の下に引き込む、炭酸カルシウムを排出するなどの活動を通して、自分により適したニッチを構築しているからにほかならない。ミミズはその活動によって環境を大幅に変化させる、と¹⁰⁾

実は、世界の歴史において果たしてきたミミズの重要な役割をおそらく初めて指摘したのは、かのチャールズ・ダーウィンであった。1881年に公刊した『ミミズと土』の中で、ダーウィンは言う。すなわち、「広い芝の生えた平地を見るとき、その美しさは平坦さからきているのだが、……このような広い面積の表面にある表土の全部が、ミミズのからだを数年ごとに通過し、またこれからもいずれ通過するというのは、考えてみれば驚くべきことである。鋤は人類

が発明したものなかで、最も古く、最も価値あるものの一つである。しかし実をいえば、人類が出現するはるか以前から、土地はミミズによってきちんと耕され、現在でも耕されつづけているのだ。このような下等な体制をもつ動物で、世界の歴史の中でそんな重要な役割を果たしたものが他にいるかどうか疑うむきもあるだろう」¹¹⁾

さて以下では、ヒトの文化進化、ニッチ構築を、まずはダーウィンの記述をベースに見ていくことにしたい。それに続いて、文化進化に関する近年の研究成果を検討し、最後に、「文化進化における負の局面」についても押さえておくことにしたい。というのも、文化進化を単純に進歩と見なして礼讃する愚を、われわれは戒めておかねばならないからである。そしてこのことは、現代において、とりわけ重要なことと考える。

2 文化進化とダーウィン

ダーウィンは『人間の由来』において、他の動物とヒトとの連続性ないし共通性を指摘するとともに、他の動物とは異なるヒトの特殊性を認めている。このヒトの特殊性は文化進化によって促進され明確になった。

ダーウィンの記述は、以下のように整理することができる¹²⁾

①第一に、哺乳類の中で基本的構造が比較的特殊化していないこと。この点は、いわゆる人間の生物学的欠陥ないし本能の退化、ひいては人間の知的能力と関連する。

②第二に、直立二足歩行について。ダーウィンは、直立二足歩行をヒト化過程の先行条件として重視し、それが防御、獲物の捕獲、食料の獲得にもたらす利益を強調した。自由な把捉手の使用、脳容量の増大などの前に直立二足歩行が始まった、とするダーウィンの見解はおそらく正しいであろう。

だが、なぜ、いかにして直立二足歩行が始まったかについては、狩猟仮説、採集仮説、種子食者説、対ヒビ競争仮説などの諸説があつて、この論争の決着はついていないようだ¹³⁾

③第三に、手による道具の製作使用について。ダーウィンによると、人間は完全な手（自由な把捉手）の使用によって石器や釣針などの道具を製作することができた。手が自由になるための不可欠の前提が、直立二足歩行であった。ダーウィンによると、「手や腕は、それが移動とか体重の支持のために習慣的に用いられたり、木に登るのに役立っている間は、武器をつくったり、石や槍をちゃんと狙いをつけて投げることができるほど、完全なものにはなり得なかった。移動や支持などという、手のいわば乱暴な使用は、手を細かく器用に用いるのに必要な触覚を鈍らせたことであろう」⁴⁾

④第四に、脳容量の増大と顔面（口吻）の縮小、小犬歯について。ダーウィンによれば、人間の初期の祖先の男性は、大きな犬歯をそなえていた。しかし、敵や競争相手と戦うために、徐々に石や棒などの武器を用いる習慣を身に付けるにつれて、顎や歯を使うことはしだいに少なくなった、という。さらに、顎骨や歯の退縮とともに顔面の縮小がもたらされた。顎骨や歯の退縮は、石器や火の使用により柔らかい食物を咀嚼するようになったこととも関連している。

⑤第五に、火の利用について。ダーウィンによれば、人間は火をおこす技術を発見し、それによって固い繊維質の根を消化しやすくし、毒を持った草の根や葉を無害にすることができる。おそらく、人類がこれまでに成し遂げたものの中で、言語を除いて最も偉大な発見は火の発見であり、それは、歴史の夜明け以前から始まるのである、とダーウィンはいう。火の利用は、人間が生物器官の変化によってではなく、道具あるいは調理方法を用いて、環境や食物を変化させていくといった、文化レベルの進化を成し遂げるのに、大きなきっかけとなったといえよう。

⑥第六に、地球上の多種の環境への適応、広範な生息分布、種内の変化に富む多型性について。ダーウィンによると、すべての人種は一つの共通祖先に由来するが、その分布域は広大である。そして、分布域の広い種は分布域の限られた種よりもずっと変異しやすいというのは、よく知られた法則である。また、人間は生存にきわめて不利と思われる条件にも長い間耐えることができる。

⑦第七に、雑食性、無毛性ということ。ダーウィンは、人間に特有な雑食性そのものにはとくに言及していないが、盲腸の虫垂に関連して、食性の変化をあげている。盲腸は、下等な草食性哺乳類、例えばコアラでは、極端に長いが、食性や習性に変化した結果、盲腸が種々の動物では、人間もふくめて、非常に短くなり、その短小化した部分の痕跡として虫垂が残された、ということだ。とくに人間の場合は、道具の使用と火の利用などに関連して、食性の変化が著しいということができよう。

また無毛性についてダーウィンは、人類の祖先が熱帯地方に住んでいたがゆえに無毛になったという説を退けて、性淘汰によりどこを求めている。つまり、人間、最初はとりわけ女性が、装飾上の目的のために毛を失うようになった、ということだ。この考えでは、人間が他のすべての霊長類と、無毛という点で非常に大きな違いを持っているのは、驚くに当たらない。というのは、性淘汰によって獲得された形質は、近縁種どうしの間でも、けたはずれに異なっている場合が多いからである。

⑧第八に、言語、文字の使用について。ダーウィンは『人間の由来』の中で、人間の言語能力あるいは言語の起源の問題を検討しているが、そこでの議論のポイントは、性淘汰によって音楽的抑揚をとまなう発声はヒトの祖先において有節言語へと進化した、ということである¹⁵⁾

⑨第九に、社会性・道徳性について。ダーウィンは、社会性・道徳性の進化という点での人間の独自性を強調し、かなり詳細な議論を展開した。

以上に見た、ヒトの特殊性についてのダーウィンの九つの項目は、かなり不十分なものではあるが、それらを参照しつつ、ジョセフ・ヘンリック（『文化がヒトを進化させた』）の文化進化に関する詳細な論点によってダーウィンの議論を補強あるいは修正していくことにしたい。

ヒトの特殊性についてのダーウィンの項目を改めて簡潔に列挙してみる。項目①（以下、番号のみ）は本能の退化、知的能力、②は直立二足歩行とその関連、③は道具の製作使用とその関連、④は脳容量の増大とその関連、⑤は火の

使用とその関連，⑥は広範な生息分布とその関連，⑦は雑食，無毛性とその関連，⑧は言語，文字の使用とその関連，⑨は社会性，道徳性の進化に関連するもの，である。

まず①についてみると，ヘンリックの議論は具体的で説得力をもつ。ヘンリックによれば，人間の知的能力は，個人の能力の寄せ集めで成り立つのではなく，先祖代々受け継がれてきた累積的文化によって生まれた集団脳（本稿「4 ヘンリックの文化進化論」参照）に存する。この集団脳についてヘンリックは，集団の規模，他集団との接触の度合いに左右されると見なす。ヘンリックは，オセアニア諸島での漁労用具の種類や複雑さについての研究に注目した⁶⁾

それによると，人口が多く，他の島々との接触度が高い島や群島ほど，漁労用具が豊富で，より複雑な漁労技術をもっていた，という。ところが反対に，ある集団が突如人口を減らしたり，社会的繋がりを失ったりすると，高度なスキルや複雑な技術も失われてしまう。実際に，タスマニアがオーストラリア大陸から分離されると同時に，タスマニアから複雑な道具が失われていった。これはタスマニア人の集団脳サイズの急速な縮小による，とヘンリックはいう⁷⁾

なお，本能の退化ということについては，項目②，③，④，⑤に関連する。すでにダーウィンが項目④で，敵や競争相手と戦うために，徐々に石や棒などの武器を用いる習慣を身に付けるにつれて，顎や歯を使うことはしだいに少なくなった，と述べている。顎骨や歯の退縮とともに顔面の縮小がもたらされた。顎骨や歯の退縮はまさに本能の退化であり，項目③の石器使用や項目⑤の火の使用と関連している。

次に項目②の直立二足歩行については，その成立の要因はおそらく単一ではなく，複合的な要因を考えねばならないのではないか。それはともかく，直立二足歩行によって可能となったヒトの進化で特筆すべきことは，100 万年以上にわたる自然淘汰のなかで，本格的な長距離走向きの身体が形成されたことである，とヘンリックはいう。具体的には，筋骨格系の構造として，土踏まず，

アキレス腱、脚の遅筋繊維、下半身の関節、大臀筋、上背部の筋肉群、(走行時の頭部の安定を司る)項靭帯、(体温調節機構としての)エクリン汗腺などが備えられたのである¹⁸⁾

項目③の道具の製作使用であるが、これは項目④とも関連しており、獲物の捕獲に用いられる槍、斧、わな、投槍器、毒薬などが生み出され、①に関連する本能の退化が促進された。

項目④については、ダーウィンの指摘とヘンリックの指摘は重なる。香原志勢によれば、咀嚼方法の変化のおかげで、咀嚼時の衝撃や振動が脳を痛めつけることはなくなった。繊維類の多い食物を多食する類人猿では、咀嚼器は強大にならざるをえず、構造的に脳の大型化は阻まれてきたが、咀嚼器の退縮にともない、現生人類において脳容量は著しく増大したのである¹⁹⁾

項目⑤の火の利用によって調理方法が生み出され、すでに述べたように、咀嚼器の退縮、脳容量の増大が結果として生じた。

項目⑥におけるヒトの広範な生息分布については、ヘンリックは次のようにいう、「ヒトという種は、地球上の広範な地域に分布し多様な環境に適応しているわりに、遺伝的多様性がかなり低い。それには十分な理由がある。文化進化は、ときとして遺伝的進化を駆動するが、その一方で、より急速な文化的適応を生み出すことによって遺伝的变化を抑制することもある」と²⁰⁾

項目⑦に関連するヘンリックの言及はとくには見当たらないようだ。

項目⑧でダーウィンは言語の起源を問題とするが、ヘンリックは別の論点を問題とする。すなわち、言語の出現こそが文化進化を可能にしたかどうかという点である。ヘンリックは、人類にとって言語が途方もなく重要であることは明らかだが、言語を重視しすぎる見方には問題がある、として次のようにいう。第一に、言語がなくとも文化進化は可能だということを認識していない。第二に、言語それ自体が文化進化の産物であって、言語が文化をもたらすわけではない。第三に、嘘、欺き、誇張などによって協力行動が妨げられる、など。確かに、言語の出現以前にも文化は存在したが、しかし、言語によって文化伝達

は著しく促進されたことは間違いない²¹⁾

項目⑨の社会性・道徳性については、後述する「文化進化といわゆる進歩の問題」の箇所ですく詳しく言及することにしたい。

3 文化進化に関する二つのアプローチ

これまで文化進化については、進化心理学からのアプローチが注目されている。このアプローチでは、ダーウィンの性淘汰説、とくに配偶者選びが知性の進化に寄与していると考えられる。

ヒトの祖先（ホミニド）において、大脳は200万年前、何の明白な理由もなく指数関数的に大きくなり始めた。しかし、およそ10万年前に、ふたたび何の明白な理由もなく停止した。この間にヒトの脳の大きさは3倍になったが、技術的な進歩はなかった。こうした大脳化の過程は石器技術の発展にともなうものではなかったため、これをどのように説明したらいいのかということが、問題となった。ともかく、従来のような自然淘汰一辺倒の理論では説明がつかない。

そこで、ジェフリー・ミラーによると、ダーウィンの性淘汰説を受けて、進化心理学は、配偶者選びにおけるライバル競争、とくに言葉を用いた求愛、情報収集と権謀術数こそ、知性をふくむ心の進化を推進した原動力に他ならない、と主張するのである。とりわけ、言語の進化が重要だった。なぜなら、それによってホミニドは、ますます複雑になった、構造化され、開放的で、さまざまな組み合わせの可能なシステムを用いて、たがいに複雑な観念とイメージを表示することができたからである。また、言語によって世間話（ゴシップ）ができるようになり、そのため、配偶者選択は個人の決定から、家族や友人からの情報を取りまとめた社会的決定へと変えられた。このように、ミラーは、配偶者選びこそ脳の進化を、それゆえまた、知性の進化を促したと考えている²²⁾

文化進化に関するもう一つのアプローチは、マキャベリ的知性仮説と呼ばれる。例えば、トーマス・ウィンによれば、ヒトの知性を支える脳の進化の大部

分は、技術の精緻化のいかなる証拠よりも先んじて起こっており、それゆえ、技術自体がヒトの能力の進化に関して中心的な役割を演じたということはない²³⁾

むしろ、社会的な相互関係、同盟関係や敵対関係、操作と騙し、約束と裏切りなどの関係の中で、情報処理能力は著しく高まったのである。例えば、仲間との同盟関係は、2個体間の競争関係よりもはるかに複雑な相互作用である。こうした同盟関係においては、予測や操作に必要な情報処理の能力は高度なものが要求される。つまり、知性の進化はマキャベリの（権謀術数的）過程による、ということだ。

このマキャベリの過程では、いったい何をめぐって争われるのであろうか。それは生存というよりも、むしろ繁殖である。もちろん、生存は大前提であろうが、知性はとくに配偶者を獲得するための戦い、すなわち、性淘汰において刺激され、進化していった。そうすると、マキャベリの知性仮説も、配偶者選びによる知性の進化を唱える進化心理学と同一のアプローチであると、暫定的にいうことができる。しかし、のちに述べるように、それは厳密に言えば、不正確である。

ニコラス・ハンフリーによれば、知性は社会が複雑になる中で高い段階にまで発展していった。それでは、社会はなぜ複雑になったのか。社会の主な機能の一つは生存技術を教えるための総合技術専門学校である。そのために、若い個体を長期に教育すること、若い個体と年長の個体が接触する機会をつくること、が必要である。しかし、その結果として、さまざまな年齢の個体が混ざり合うことになり、社会的な対立・葛藤も増えるので、社会にとってはかなりの負担となる。それゆえ、そうした対立・葛藤を調整するための情報処理能力・交渉能力である社会的知性が必要となった、ということである。ちなみに、こうした社会的知性が一般に「マキャベリの知性」と呼ばれる。このハンフリーの説明によれば、マキャベリの知性仮説は、たんに配偶者選びによる知性の進化を唱える進化心理学の守備範囲には収まらないアプローチということができ

る²⁴⁾

さて、上述の二つのアプローチにおいて私は、文化進化の核心となるものとして脳の進化に焦点を当て、これを推進した過程として、配偶者選びとマキャベリの知性を上げた。これらは等しく社会的過程によって脳容量の増大を説明するものである。この説明は一括して「社会脳」仮説と呼ぶことができる。

アレックス・メスーディによると、この「社会脳」仮説はニコラス・ハンフリー、アンドリュー・ホワイトウン、リチャード・バーン、ロビン・ダンバーらが提唱した。この仮説によれば、人間を含めた霊長類の大きな脳は、食料を探したり道具を用いたりといった生態学的な問題を扱うためではなく、社会的な問題を解決するために進化した。というのも、社会との関わりは広範囲の困難な問題を生じさせるからである。例えば、他の人と行動を協調させるとか、意図をうまく相手に伝える、他人との連携をする、目的を達成するために時には人を欺いたり、あるいは逆に欺かれないようにするといったことはすべて、きわめて複雑な認知能力を必要とする。この「社会脳」仮説の根拠として、脳のサイズが霊長類において、さまざまな社会的行動の測定値——集団のサイズ、相互交流に費やされる時間、欺瞞の頻度、社会的遊びの頻度——と相関していることがあげられる。他方、脳のサイズと、社会性のない行動の値——なわばりの広さ、道具の使用、食事など——との間に相関は見られない、ということである²⁵⁾

4 ヘンリックの文化進化論

ヒトの文化進化を全体として取り扱う視点を提起したのがジョセフ・ヘンリックである。ヘンリックは、経済学、心理学、神経科学および考古学などの豊富なデータとそれに基づく周到な理論分析に基づいて、包括的な文化進化論を展開する。

ヘンリックの著書(邦訳『文化がヒトを進化させた』2019)の原題(*The Secret of Our Success*, 2015)にもあるように、ヘンリックの議論の核心は、「人類の

成功の秘密は、個々人の頭脳の力にあるのではなく、共同体のもつ集団脳（集団的知性）にある」ということである（ちなみに、集団脳に関する具体例は、本稿「2 文化進化とダーウィン」ですでに述べた）。さらに、「この集団脳は、ヒトの文化性と社会性とが合わさって生まれる、つまり、進んで他者から学ぼうとする性質をもっており、しかも、適切な規範によって社会的つながりが保たれた大規模な集団で生きることができるからこそ、集団脳が生まれるのである」²⁶⁾ 明らかに、ヘンリックの議論は従来の進化論のアプローチとは違っている。つまり、ヘンリックは従来型の進化論的説明に満足していない、ということである。

ともあれ、ダーウィンとの関連でいえば、ダーウィンのいう人間の特殊性は全体として文化的適応の結果であるというのが、ヘンリックの主張である。そうした文化的適応そのものを可能にするのが、社会集団において広く行き渡った文化的学習の能力である。この文化的学習の能力をヘンリックは、他者の心理をその行動から分析する能力、すなわちメンタライジング（*mentalizing*）または心の理論と呼ぶ²⁷⁾

それでは、人類の祖先にそうしたメンタライジングの能力が発達したのはなぜなのか。ヘンリックによれば、文化や文化進化は、他者から学ぼうとする遺伝的に進化した心理的適応の結果なのである。つまり、他者から学ぶ能力を備えた脳をつくる遺伝子に対し、自然淘汰が有利に働いた。こうした文化的学習の能力が、集団内で長期にわたって発揮されると、便利な道具をまねて作ったり、動植物に関する豊富な知識を共有したりといった、数々の適応行動が生まれてくる。こうした行動は、学ぼうとする頭脳が集団内で長期にわたって相互作用を繰り返した結果、意図せずして生まれたものだ、とヘンリックは説明する²⁸⁾

ここで、そもそもヘンリックの議論は従来の進化論と比べてどういう新機軸を提起しているものなのか、その点を見ておく必要があるだろう。

人類進化を説明する通常ストーリーによれば、遺伝的進化が長らく続いた

のち、今から10万年か5万年前に突然、進化が加速して創造的活動が始まったとされている。その後、遺伝的進化は止まり、文化進化がそれに取って代わったのだという。このような見方だと、文化は、遺伝子のみならず、脳や身体機能とも切り離されてしまう。

また、進化論的な考え方を、ヒトの脳、身体機能、および行動に適用しようとする最近のアプローチもやはり、一方向の因果関係を想定している。すなわち、遺伝子の変化によって生理・心理が変化した、そしてその結果として、行動・文化が進化した、というストーリーである。

ヘンリックによると、このような従来の進化論的アプローチは、文化に対する重要性の認識が低く、文化や文化進化はどちらかという最近の現象であって、純粋な遺伝的進化によって出現した人間の本性の大きなコア部分は変わらない、と見なす。すなわち、「従来の進化論的アプローチは……何十万年、もしくはそれ以上の長期間にわたって、ヒトの遺伝的進化を駆動してきた最大の要因が文化進化であったことを認識していないのである」とヘンリックは批判する²⁹⁾

こうした従来の進化論的アプローチに対する対案として、すでに述べた「文化進化に関する二つのアプローチ」が登場した次第である。一つは、配偶者選びにおけるライバル競争、とくに言葉を用いた求愛、情報収集と権謀術数こそ、知性をふくむ心の進化を推進した原動力であるとする進化心理学の見方、もう一つは、社会的な相互関係、同盟関係や敵対関係、操作と騙し、約束と裏切りなどの関係の中で、情報処理能力は著しく高まったという、いわゆる「マキャベリの知性仮説」である。いずれも、人間の文化が果たす役割を強調している。

そうした流れに棹さして、ヘンリックも、文化によってこそヒトは進化した、と強調する。例えば、牛乳を飲む習慣によって生じた遺伝子の変化は、比較的最近起きたフィードバック効果のケースである、とヘンリックはいう。ヒトも含めて哺乳類の健康な赤ん坊はみな、ラクターゼという乳糖分解酵素を十分備えて生まれてくる。この酵素が小腸で乳糖（ラクトース）を分解してくれるお

かげで、その栄養を吸収することができる。しかし、ほとんどの人は離乳期を過ぎるとラクターゼの産生が減り始め、5歳ごろにはもう、乳糖を分解できなくなる³⁰⁾

ところが、ヨーロッパ、アフリカ、中東などで、大人になってからもずっとミルクを消化できる人々がいる。このような乳糖耐性（ラクターゼ活性持続）の人は、思春期になっても、大人になっても、ミルクの栄養を摂取できる。こうした乳糖耐性は、かなり直接的な遺伝子制御の結果である、とヘンリックはいう³¹⁾

つまり、1万2,000年ほど前にウシ、ヒツジ、ラクダ、ウマ、ヤギなどの動物を家畜化したことにより、成人の飲用になりうるミルクが登場した。余分なミルクの存在こそが、離乳後もずっと乳糖の分解能力をもつことが有利になるような選択圧を生み出した、と。そこで、ヘンリックは、乳糖耐性遺伝子に自然淘汰が働いたのは、何よりもまず、牧畜と搾乳という文化によるものだ、と強調する³²⁾

すでに述べたように、ヘンリックは、人類の成功の秘密は共同体のもつ集団脳（集団的知性）にある、と見ている。この集団脳によって文化的適応が可能となり、道具、武器、食物の加工処理法、社会規範、制度、言語などが生まれた、ということである。さらに、文化的適応の出現によって、遺伝的变化が促されるようになったということ、具体的には、牧畜社会において乳糖耐性という遺伝的性質を多くの人々が身に着けたのである。ここで確認しておかねばならないことは、文化が単独に遺伝子を変化させたということではない。そうではなく、文化-遺伝子共進化によって遺伝子の変化が生じたということである。

しかし、集団脳の形成とともに、ヘンリックは、文化進化を方向づけたものとして、集団間競争を取り上げている³³⁾ヘンリックは、五つのタイプの集団間競争を指摘する。すなわち、①戦争や襲撃。この場合、協力的行動を促す規範をもち、技術面、軍事面、または経済面で優位に立つ集団が、そうした規範を

もたない集団を駆逐，排除，あるいは吸収していく。②集団としての生存力の格差。すなわち，協力行動，分配行動，および集団内調和を促す社会規範をもつ集団こそが生存力で優位に立つ。③移住者数の格差。つまり，移入者が増加する集団がますます発展する。④繁殖力の格差。出生率の高い集団には相応の社会規範があり，また，多産を奨励する神への信仰などもある。⑤名声バイアスによる文化伝達。これは，成功集団として認められた集団の社会規範，思想，信念，風習などは近隣集団へ伝播するということである。ただヘンリックは，問題点も指摘する。すなわち，集団間競争を勝ち抜くのに有利な規範や信念は，他集団を，獣，畜生，鬼などと呼んで殲滅させることもあるということであり，このことは後に触れる，ゼノフォービア（よそ者嫌い，部外者嫌い）と関連する。

5 文化進化における負の局面

ヘンリックの文化進化論は，従来の進化論的ストーリーを批判して文化進化の役割を強調することが主たる目的であるゆえ，文化進化の問題点，その否定的な局面を指摘することはなかった。もちろん，だからといって，ヘンリックの議論の意義が損なわれるわけではない。しかし，文化進化を総体として問題とする以上，そのポジティブな局面だけでなく，そのネガティブな局面も取り上げなければならないだろう。それゆえ，文化ないし文明における進歩の問題，植民地主義，地球環境問題，集団感染症についても触れておかねばならない。

1) 文化進化といわゆる進歩の問題

17世紀から19世紀にかけて，知識（科学）の進歩あるいは人間精神の進歩，文化ないし文明の進歩という思想がこの間の時代を特徴づけた。こうした進歩を測る基準は，よりすぐれたもの・高次のものへの前進ないし向上ということになるだろう。あるいは，1970年代の初頭に『歴史の進歩とはなにか』とい

う刺激的な著作をものした市井三郎の言葉を借りると、進歩とは、「時間とともに変わる変わり方が、価値的によい方向へむかうこと」ということができる。ダーウィンが生きた19世紀英国のヴィクトリア朝時代には、進化の観念と進歩の観念が密接な関連で語られていた。すなわち、生物進化のレベルで展開されたダーウィンの進化論が文化進化のレベルに適用され、進化はそのまま進歩を意味するものと当時理解されていた、というのが通説であろう³⁴⁾

ダーウィンが『人間の由来』という著作の中で述べているように、他の動物と同じく本来的に利己的な生き物である人間が、損得勘定から、あるいは見返りを期待して仲間と協力するといった仕方で、道徳は進化した。人間の場合は、すぐれた個体識別能力と記憶力、比較的長期の共同生活という条件のもとで、他の動物よりもいっそう進んだ協力関係を結ぶことが可能となった。そして、モラルの遵守と違反に対してはそれぞれ賞讃と非難という感覚が働き、モラルを感覚的に身に付けていった。これがいわゆる道徳感覚（モラルセンス）である。しかし、そのモラルセンスはきわめて局限されており、小集団内部にのみ当てはまるものだった。文化・文明の発展の中で道徳ないし倫理の進化を見れば、協力関係もモラルセンスのおよぶ範囲も血縁小集団の枠を越えて広がったことは確かである。こうした事態をダーウィンは“道徳性の標準の高度化”とよんでいる。それはそれとして確認されねばならないことである³⁵⁾

ただし、ダーウィンは、小集団モラルの持つ二重基準、すなわちネポティズム nepotism（縁者びいき、身内びいき）とゼノフォビア xenophobia（よそ者嫌い、部外者嫌い）、あるいはウィルソンの指摘する学習規則が文化進化の中でも持続することを、深刻に受け止めてはいなかったようだ。その意味で、ダーウィンは道徳ないし倫理の進化に関してきわめて楽観的な見方をしていた。つまり彼は、協力の進化のポジティブな面だけを見て、そのネガティブな面を見ていなかった³⁶⁾

人間の道徳ないし倫理の起源は、石器時代の血縁小集団、せいぜい数十人単位の集団の中で生まれてきた道徳にまでさかのぼってみることができる。この

血縁小集団における道徳（小集団モラル）は互恵的利他主義とよばれる。それは、自分の集団の中での仲間と仲間の信頼・協力・相互扶助こそ彼らの生存にとって最高のものであると、高く評価する。しかし、こうした小集団モラルはきわめて閉鎖的で局限されたものである。すなわち、このモラルは、すでに述べたネポティズムとゼノフォビアを最大の特徴としている³⁷⁾

それゆえ、この小集団モラルの進化は二重基準（ダブル・スタンダード）をはらんだものであった。すなわち、自分の集団の中での信頼・協力・相互扶助という結びつきは、他の集団に対しては一転して、敵意・排除・攻撃という対応を正当化するものとなる。要するに、自集団の中での小集団モラルの進化は、同時に、他集団に対する反モラルの進化を意味する。こうして、小集団の内部での善良な行動は、他集団に対しては邪悪な行動へ転化する、というわけである。例えば、原始社会の部族内部において暴力を抑止する儀礼化された諸規則があるが、それは外部の集団（人間）に対する暴力には適用されない³⁸⁾

ヘンリックは、ヒトが他の動物よりも協力的なのはなぜかということについて、次のようにいう。「集団間競争が繰り広げられるなかで、競争を有利に導くような社会規範が優勢になり、とりわけ、集団の規模、結束力、社会的相互作用、協力行動、経済生産性、集団内調和、リスクの共同負担などを促進する規範が広まっていった。そうになると、遺伝子は、利己的な規範違反者は罰せられるという、向社会的な規範をもつ社会のなかで生き残っていかなくてはならなくなる。そこで有利になるのは、共同体の仲間へ危害を加えない、他者を公正に扱う、といった規範をもつ社会になじむ、向社会的な心理の遺伝子だったはずだ」。さらに、「親族や互恵性に関する社会規範が生まれ、悪評を立てられたり制裁を受けたりする脅威にさらされるようになったことで、同族意識や互恵精神をさらに強める遺伝子に有利な状況が生まれた。このようにしてヒトは、家族や友人に対しても、また共同体や部族のレベルにおいても、他の動物よりも協力的な行動をとるようになっていった」と。こうしたヒトの協力行動は、文化－遺伝子共進化の視点を取り入れてはじめて、明らかになるという³⁹⁾

しかし実際には、この協力行動という美德の発展は同時に悪徳の発展でもあった、ということは確認しておかねばならない。これに関して、ランガム／ピーターソンはつぎのように指摘する。すなわち、集団への忠誠心を基盤にした倫理が進化の歴史の中で成功を取めたのは、集団をより攻撃的にする効果があったからである、と。また、平和と戦争は同じコインの表裏の関係にあるものであり、戦争によって集団のアイデンティティが創られる、と見なされる⁴⁰⁾

確かにダーウィンの言うように、人類の歴史、文化進化において“道徳性の標準の高度化”を確認できるが、ことはそう単純ではなく、同時にそれとパラレルに、“反道徳性の標準の高度化”も確認されねばならないのである。

以上のことを強調しなければならない理由は、文化進化において、科学技術の進歩、人類の（というより、先進国の人々の）物質的繁栄が達成されてきたが、しかしそうした進歩が、一方の集団・社会・民族・国家に対する他方のそれらの征服・支配を通じて可能になったという屈折した冷厳な事実を見落とさないためである。このことは、以下に述べる「文化進化における植民地主義と地球環境問題」に関連する。

2) 文化進化における植民地主義と地球環境問題

生物進化は生存闘争と種分化によって生物種の多様性を、つまり生態系を創出した。これに対して、文化進化は単一の種（人類）による道具や建築物、社会制度など文化の多様性をもたらした。しかし、人類の支配的な文明（西欧文明）が近代に至って、文化の多様性と生態系の多様性を地球規模で破壊し、つまるところ現代の地球環境問題を生み出した。もちろん、だからといって、文化進化は否定されるものではない。人類の文化・文明はまさに文化進化によって可能となったのであり、人類の現在は文化進化のおかげなのである。かりに生物進化のみにしたがっていけば、人類の繁栄——といっても、かなり偏った地域差のある繁栄であるが——はありえなかったし、ヒトは多様な生物の捕食－被食関係の連鎖の中に組み込まれていたに違いない⁴¹⁾

さて、西欧列強(オランダ、イギリス、フランス、スペイン、ポルトガルなど)が植民地にしようとして触手を伸ばしたアフリカには、すでに先住民が生活しており、採集狩猟といった原始的な様式であれ、独自の経済・社会・文化を形成していた。そうした先住民の生活を、経済・社会・文化を残酷に破壊することが、列強の行った植民地化に他ならなかった⁴²⁾

西欧列強による近代植民地の獲得は15世紀末からの大航海時代のいわゆる「地理上の発見」に始まる。まずスペインが西インド諸島に拠点を築いて中南米を次々に征服した。彼らは先住民を強制労働させて金銀などの鉱山を開発し、また先住民の土地を奪って砂糖などの農園をつくり、支配者として永住した。侵略をうけた中南米の諸文明は、伝染病の蔓延や近代的軍隊への対応力の欠如などが重なって敗北を重ね、崩壊した。

ポルトガルは新大陸では17世紀前半までにブラジルに砂糖などのプランテーションを築き、アジアではインドのゴアを拠点として香料貿易を行い大きな利益をあげた。また彼らは、西アフリカで黒人奴隷を手に入れ、新大陸で先住民に代わる労働力として売り払う奴隷貿易に先鞭をつけた。

このようなスペインとポルトガルの植民地帝国に対して、オランダ、イギリス、フランスの3国が相互に競争しつつ挑戦していった。

それでは、実際の植民地建設はどのようなものであったのだろうか。第一に指摘しておかねばならないのがプランテーションであり、第二に奴隷貿易である。

17、18世紀以降に、ヨーロッパ列強は熱帯・亜熱帯アジア、アフリカ、ラテン・アメリカなどの地域に、現地の農業生産を無視して、大土地所有に基づく単一作物の栽培(モノカルチャー)に特化した大規模農園、プランテーションを建設した⁴³⁾ このプランテーションの導入によって、熱帯・亜熱帯アジア、アフリカ、ラテン・アメリカにおける現地の自給自足経済は破壊され、これら第三世界は西欧列強のための第一次産品、食糧と資源の供給源とされた。

次に奴隷貿易について見ると、近代の奴隷貿易ではほとんどもっぱら、主と

して南北アメリカに開かれた広大な植民地におけるプランテーション経営のために、アフリカ西海岸から黒人奴隷が供給された。この奴隷貿易は、ヨーロッパから武器や雑貨を西アフリカに送り、これらの商品と引き換えに得た黒人奴隷をアメリカ大陸・西インド諸島に売り、そこから砂糖・綿花・タバコ・コーヒーなどの農産物をヨーロッパに持ち帰って高い値段で売る、という三角貿易の一環として行われた。

15世紀以来、アフリカ西岸に拠点を築いたポルトガルは、この地で得た黒人を奴隷として使うようになった。スペイン領の南アメリカで鉱山労働などに使役されたインディオが、重労働と伝染病などのために激減し、またラス・カサスがインディオ保護を主張したために、インディオに代わる労働力として黒人奴隷が求められた。西欧諸国がアフリカから南北アメリカに運んだ黒人奴隷の総数は、1,500万人から2,000万人程度というのが通説になっているが、4,000万人以上という推計もある。ピークをなした1761年から1810年までの半世紀だけでも、360万～370万人とされる⁴⁴⁾

イギリスなどの産業革命、そしてとくに20世紀後半からの先進国の経済発展によって、現在の地球環境問題が引き起こされたことはよく指摘されるが、それだけでは十分でない。そもそも西欧列強の産業革命が可能になったのも、技術革新や労働力の増加が内部条件となったとしても、列強の植民地主義による海外市場の確保、植民地の資源収奪があったからである。それゆえ、地球環境問題の淵源はひとえに西欧列強の植民地支配にまでさかのぼらねばならないのである。

西欧列強の植民地主義によって、森林は破壊され、農地もプランテーションで拡大され、鉱物資源の採掘、動物の乱獲などで熱帯の生態系は破壊された⁴⁵⁾。こうした植民地支配の延長線上に、現在の南北問題、先進国と発展途上国の経済格差がある。

3) 文化進化と集団感染症

ジャレド・ダイヤモンドによれば、西欧列強の植民地侵略において、戦闘車輻の役割を果たした馬と同じく重要だったのは、家畜から人間にうつった病原菌（天然痘、麻疹、インフルエンザなど）の果たした役割であった。こうした病原菌は、ヨーロッパ人が南北アメリカ大陸やオーストラリア大陸、南アフリカ、そして太平洋諸島の先住民を征服するうえで、決定的な役割を果たしたのである⁴⁶⁾

以下、ダイヤモンドの議論を紹介する。

近代人の主要な死因に数えられる感染症として、天然痘、インフルエンザ、結核、マラリア、ペスト、麻疹、コレラなどがある。これらの感染症は、もともと動物がかかる病気だったが、いまでは人間だけが感染して動物は感染しない⁴⁷⁾

基本的に、病原菌も、われわれ人間と同様、自然淘汰の産物である。病原菌は、その進化の過程で、ある個体（動物または人間）から別の個体へ感染するためのさまざまな手段を編み出してきた。自然淘汰においては、うまく伝播して感染個体の数を増やすことができ、より多くの子孫を残すことができる病原菌が結局は生き残る。病気になったときに出てくるさまざまな「症状」は、じつは、病原菌が感染を広げる手段に人間を使おうとして、感染個体の体の働きをいろいろ巧妙に変化させていることの表れなのである⁴⁸⁾

さて、集団感染症であるが、これは、人類全体の人口が増大し、人々が密集して暮らすようになってから初めて見られるようになった。こうした人口密集地は、人類史上、農業が始まった1万年ほど前に登場し、数千年前に都市生活が始まるとともに加速度的にその数を増やしていった。

すなわち、人口密集地の出現によって病原菌は感染を拡大しうる機会を得ることになった。さらに、病原菌にとってのもう一つの幸運は、交易路の発展によってもたらされた。ヨーロッパ、アジア、北アフリカの間で交易が行われるようになったローマ時代には、それらの地域が一つに結ばれ、病原菌の一大繁

殖地ができあがる。⁴⁹⁾

病原菌が人類の歴史にいかにも恐ろしい影響を与えたかを如実に示すものとして、ダイヤモンドは、ヨーロッパ人による南北アメリカ大陸への侵略、征服過程をあげている。例えば、アステカ帝国、インカ帝国、北米アメリカの先住民は、天然痘などの大流行によって激減した。当時のアメリカ大陸には約2,000万人の先住民が暮らしていたが、コロンブスの侵略以降、先住民の95%も減少したことが推定される、という。これらの先住民は、ヨーロッパ人に出会うまで、ユーラシア大陸の病原菌にさらされたことがなかった。そのため、それらの病原菌に対する免疫を持っていなかった。その結果、彼らの多くが、天然痘、麻疹、インフルエンザ、チフスなどで死亡したのである。これらに続く死因は、ジフテリア、マラリア、おたふく風邪、百日咳、ペスト、結核、黄熱病などだった⁵⁰⁾

ダイヤモンドは、南北アメリカ大陸の先住民に比べて、ヨーロッパ人が彼らより優れた武器、より進歩した技術や、より発達した政治機構を持っていたことは間違いない、という。しかし、このことだけでは、少数のヨーロッパ人が、圧倒的な数の先住民が暮らしていた南北アメリカ大陸やその他の地域に進出していき、彼らにとって代わった事実は説明できない。そのような結果になったのは、ヨーロッパ人が、家畜との長い親交から免疫を持つようになった病原菌を、とんでもない贈り物として、進出地域の先住民に渡したからである、とダイヤモンドはいう⁵¹⁾

しかし、旧大陸を起源とする致死性の感染症が新大陸に伝播したのに対して、逆に、新大陸から旧大陸に伝播した致死性の集団感染症が、おそらくは一つもなかったのはなぜなのか。集団感染症を引き起こす病原菌は、すでに述べたように、人口密集地において発生し、繁殖する。ダイヤモンドによると、アステカ帝国の首都であったテノチティランのような都市は、当時、世界最高の人口密度を誇る都市の一つであった。だが、テノチティランには、侵入してきたスペイン人に感染するような特有の病原菌がはびこっていなかった。そ

れはなぜか。一つの可能性としては、人口の稠密な人間集団が新世界では旧世界より時代的に遅く発生したことが考えられる。もう一つの可能性は、アンデス、中米などの人口密集地が、ローマ時代のヨーロッパ、北アフリカ、インド、中国のように、定期的な交易で結ばれることがなく、そのため病原菌の巨大な繁殖地を形成しなかったということかもしれない、とのことである。さらに、新大陸特有の集団感染症が登場しなかった理由として、もともと新大陸には、家畜化の対象となるような野生動物があまり生息していなかった、ということがある。というのも、集団感染症の病原菌は、群居性の動物が家畜化されたときに、それらの動物が持っていた病原菌が変化して誕生したものだからである⁵²⁾

お わ り に

本稿は、文化進化をめぐる諸問題を扱ったが、もちろん、私自身の非力ゆえ内容は限定的であり、扱うべくして扱えなかった文献、諸論点があり、幾つか補足しておきたい。アトランダムに列挙してみよう。

エルマン・サーヴィス『文化進化論』は、進歩の非単系的性格を強調し、二つの一般原理を提示する。一つは、「進歩の系統発生的不連続」であり、先進形態は通常、次の先進段階を生み出すものではなく、次の段階はそれとは別の系統から始まる。もう一つは、「進歩の地域的不連続」といい、もし進歩の諸段階が一つの種から次のその子孫へと順を追ってつながっていないとすれば、そうした継続段階が同一の地域内で現れるとは考えられない、ということである。さらに、トロツキー『ロシア革命史』にふれて、「歴史的後進性の特権」をあげる。これは、後進文明には先進文明にはない進化の潜在力が存在することを意味する、という。例えば、ロシアは、先進諸国の発展をなぞることはせず、これら諸国の最新の成果をみずからの後進性に適合させながら、この発展の仲間入りを果たした⁵³⁾

次に、アレックス・メスーディ『文化進化論』は文化の三つの側面、すなわ

ち、社会的学習、文化的伝統および蓄積的（累積的）文化にふれている。このうち、社会的学習と文化的伝統は人間以外の動物にもある。例えば、ネズミは、ある物が食べられるかどうかを、他のネズミの息の匂いから判断する。つまり、以前にその匂いを他のネズミの息から嗅いだことのある食べ物と、まったく新しい匂いのする食べ物があれば、前者を選ぶ。また、例えば、ギニアとコートジボワールの二地域に棲むチンパンジーは、木の実を大きくて平たい石の上に置いて別の小さい石で叩いて割る。対照的に、アフリカ東部のタンザニアの二地域、ゴンベとマハレのチンパンジーには、同じ方法で木の実を割る様子は観察されなかった、という。しかし、効果的な改良を何世代にもわたって積み重ねて継承していく文化をもつ種は、人間だけだという⁵⁴⁾

また、ロナルド・イングルハート『文化的進化論』では、進化論的近代化論についての検討がなされる。すなわち、経済的、身体的に不安定な状況では、排外主義、内集団内の強い結束、権威主義的な政治や集団の伝統的な文化規範を厳守する傾向などにつながり、反対に安泰な状況下では、外集団への寛容さが増し、新しい考え方を受け入れやすく、社会的規範はより平等主義的になるとする、ものである。

イングルハートの議論は、1981年から2014年の間に100を超える国や地域で行われた何百もの全国標本調査で得られたデータの分析に基づいており、全体として、物質主義的価値観重視から脱物質主義的価値観重視へのシフトを確認している。なお、このシフトは、生存欲求を最優先する生存重視の価値観からジェンダー間の平等や環境保護、寛容さ、他者との信頼関係、選択の自由などを重視する自己表現重視の価値観へという、より幅広い文化的シフトの一部とされる⁵⁵⁾

さらに、ロバート・アンジェ編『ダーウィン文化論』では、「遺伝的ではない手段、とくに模倣により伝えられると考えられる文化の単位」（スーザン・ブラックモア）とされる「ミーム」（meme）について議論が交わされる⁵⁶⁾ このミームなるものによって文化を論じるのがスーザン・ブラックモアであり、そ

の著書『ミーム・マシーンとしての私』である。ブラックモアによれば、人間の脳はミームの利益のためにデザインされている、という。すなわち、「われわれの祖先が模倣する能力を習得したとき、人間の進化に重要な転回点が訪れた。このときから、ミームは自身を複製するのにとくに都合のよい脳を生産するために、遺伝子を動かし始めた」⁵⁷⁾しかし、こうしたミーム論的文化論が、すでに検討したダーウィンやヘンリックなどの文化進化論に取って代わるものかどうか、甚だ疑わしい。

例えばミーム論では、人間の文法は、狩猟や食物採集や社会的契約の象徴的な表現といった何らかの特別な話題についての情報を伝えるというよりもむしろ、高度の忠実度、多産性、長寿をもつミームを伝達するためにデザインされた、という。これに対しては、『ダーウィン文化論』に収められている、ダン・スペルベル「文化へのミーム的アプローチに反論する」の議論のほうが説得的である。スペルベルは言う、「同じ言語共同体に所属する異なったメンバー同士で内部化している文法と辞書が似ているのは、ほとんどの場合コピーによるものではなく、進化の結果人間にすでに備わっている言語装置、コミュニケーション装置、概念装置によるところが大きい」⁵⁸⁾この反論は、ノーム・チョムスキーの普遍文法論あるいは言語習得装置の理論に対応する。すなわち、人間の脳内には、特定言語の文法に対応するものではないが、すべての言語の文法に変換しうる普遍的な文法構造が備わっている、とする説である。

そのほか、オドリン＝スミー他『ニッチ構築』が文化進化論に関わる論点を提起している⁵⁹⁾すでに言及したように、「ニッチ構築」とは、生物体が自らの環境を改変する能力を意味する。ちなみに、そうした「ニッチ構築」論の背景には、従来の進化論、適応論への批判がある。すなわち、従来の進化論では、生物体が環境を構築する能動的な役割を正当に捉えていない、ということである。とはいっても、生物体に影響を及ぼす環境の役割を無視することはできないことは言うまでもないが、従来は、環境に影響を及ぼす生物体の役割が無視ないしは過小評価されていた。

そうした流れの中で、生物進化の枠組においては捉えきれない文化進化に関する議論が登場しているという事情があるだろう。その意味で、文化進化論、文化的ニッチ構築の議論は今後とも必要なものであるといえよう。ただし、すでに述べたように、そうした議論において、この文化進化、ニッチ構築のポジティブな面だけでなく、ネガティブな面をも視野に入れておかねばならないのではないか。

注

- 1) 『世界大百科事典』(1998)によると、文化人類学における文化の定義の中で最も古典的なものは、E. B. タイラーが『原始文化』(1871)の冒頭で示した定義である。タイラーによれば、「文化または文明とは、知識、信仰、芸術、道徳、法律、慣習その他、社会の成員としての人間によって獲得されたあらゆる能力や慣習の複合総体である」(「文化人類学からみた〈文化〉」の項目)。また、『広辞苑』によると、「文化 ③ (culture) 人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住をはじめ科学・技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容とを含む。文明とほぼ同義に用いられることが多いが、西洋では人間の精神的な生活にかかわるものを文化と呼び、技術的発展のニュアンスが強い文明と区別する」。
- 2) 『世界大百科事典』の「文化進化」の項目、参照。
- 3) ヴケテイツ『進化と知識』入江重吉訳、法政出版、1994年、172-176頁、参照。
- 4) 川出由己『生物記号論－主体性の生物学』京都大学学術出版会、2006年、278-279頁、参照。
- 5) ダマシオ『進化の意外な順序』高橋洋訳、白揚社、2019年、287-299頁、参照。
- 6) 同上書、61-70頁、参照。
- 7) 同上書、292-293頁、参照。
- 8) 同上書、297頁、参照。
- 9) ファインバーグ／マラット『意識の進化的起源』鈴木大地訳、勁草書房、2017年、59頁、117頁、217頁、参照。
- 10) オドリン＝スミー他『ニッチ構築』佐倉統他訳、共立出版、2007年、303-304頁、参照。
- 11) ダーウィン『ミミズと土』渡辺弘之訳、平凡社、1994年、284-285頁、参照。なお、ダーウィンは、その後に次のように続けている。「しかしながら、さらに下等な体制をもつ動物、すなわちサンゴのなかには、大洋の中に無数のサンゴ礁や島を築くという、もっと顕著な働きをするものがある」(285頁)と。すなわち、すでにダーウィンはミミズとサンゴのニッチ構築を認めていたのである。

- 12) ダーウィン『人間の由来』——池田次郎・伊谷純一郎訳『人類の起源』中央公論社, 1967年 [1871年]; 筑波常治『人類の知的遺産 47 ダーウィン』講談社, 1983年, 参照。
- 13) 黒田末寿他『人類の起源と進化』有斐閣, 1987年, 50-68頁, 参照。
- 14) ダーウィン『人間の由来』——池田次郎・伊谷純一郎訳『人類の起源』中央公論社, 1967年 [1871年], 110-111頁, 参照。
- 15) 入江重吉『ダーウィンと進化思想』昭和堂, 2010年, 44-46頁, 参照。このように、ダーウィンは言語の起源を性淘汰との関連で考えた。そして、言語はいうまでもなく、知性の進化とはきつてもきりはなせないものである。だから、ダーウィンが知性の進化を自然淘汰だけで説明していたということにはならない。その意味で、「文化進化に関する二つのアプローチ」で取り上げる最近の説が、まったく新しい学説だということとはできないだろう。その先駆けの一つとしてダーウィンをあげないわけにはいかない。とはいっても、ダーウィンが知性の進化について明確なかたちで述べていたわけではないことは確かである。
- 16) ヘンリック『文化がヒトを進化させた』今西康子訳, 白揚社, 2019年, 324頁, 参照。
- 17) 同上書, 325頁, 参照。
- 18) ヘンリック『文化がヒトを進化させた』今西康子訳, 白揚社, 2019年, 114頁, 参照。
- 19) 香原志勢『顔と表情の人間学』平凡社, 1995年, 21-23頁, 参照。
- 20) ヘンリック『文化がヒトを進化させた』今西康子訳, 白揚社, 2019年, 146頁, 参照。
- 21) 同上書, 381-382頁, 参照。
- 22) Cf. Miller, G. F.: How Mate Choice Shaped Human Nature: A Review of Sexual Selection and Human Evolution. In: Crawford / Krebs: *Handbook of Evolutionary Psychology*, Lawrence Erlbaum Associates, 1998, pp. 87-129. また, ミラー『恋人選びの心 I, II』長谷川真理子訳, 岩波書店, 2002年, 参照。
- 23) ウィン「道具とヒトの知性の進化」, バーン/ホワイトウン『マキャベリ的知性と心の理論の進化論』藤田和生他訳, ナカニシヤ出版, 2004年, 所収, 312-329頁, 参照。
- 24) ハンフリー「知の社会的機能」, バーン/ホワイトウン『マキャベリ的知性と心の理論の進化論』藤田和生他訳, ナカニシヤ出版, 2004年, 所収, 12-28頁, 参照。
- 25) メスーディ『文化進化論』野中香方子訳, NTT出版, 2016年, 219頁, 参照。
- 26) ヘンリック『文化がヒトを進化させた』今西康子訳, 白揚社, 2019年, 25頁, 参照。なお, コ克蘭他『一万年の進化爆発』(古川奈々子訳, 日経BP社, 2010年)の関連する記述を引用しておく。すなわち, 「地域がより広大で, 人口がより多ければ, より多くの発明者があられ, より競争的な社会がつくれ, 利用可能なより多くの技術革新が生まれる——そして, 革新を実行し, それを保持するためにより大きな圧力がかかる。なぜなら, それがうまくできない社会は競争的な社会によって排除されてしまうからだ」(86頁)。
- 27) ヘンリック『文化がヒトを進化させた』今西康子訳, 白揚社, 2019年, 86-88頁, 参照。

- 28) 同上書, 65 頁, 参照。
- 29) 同上書, 464-465 頁, 参照。
- 30) 関連して, アンジェ編『ダーウィン文化論』佐倉統他訳, 産業図書, 2004 年, 153 頁; オドリン=スミエ他『ニッチ構築』佐倉統他訳, 共立出版, 2007 年, 22 頁; ブック『私たちは今でも進化しているのか』渡会圭子訳, 文藝春秋, 2015 年, 114 頁, 275 頁, 参照。
- 31) ヘンリック, 同上書, 137-138 頁, 参照。
- 32) ヘンリック, 同上書, 136-138 頁, 参照。
- 33) ヘンリック, 同上書, 253-255 頁, 参照。
- 34) 霜田求「歴史と進歩の観念」, 隈元忠敬編『人間論の可能性』昭和堂, 1994 年, 所収; ステント『進歩の終焉』渡辺格ほか訳, みすず書房, 1972 年; ポラード『進歩の思想』舟橋喜恵訳, 紀伊國屋書店, 1971 年; 市井三郎『歴史の進歩とはなにか』岩波書店, 1971 年, 参照。
- 35) 道徳性の進化に関するダーウィンの説明をたどってみよう。ダーウィンは集団淘汰の論理でつぎのようにいう、「同じ地方に住んでいる原始人の二つの部族に争いが起こったとき, もし(ほかの環境条件は等しいのに)一方の部族には, 勇敢で, 共感的で, 誠実な者が大勢いて, つねにたがいに危険を警告しあい, 助けあい, 守りあうことができるならば, この部族のほうがより成功し, もう一方の部族にうち勝つだろう」と。さらに, そうした「資質が豊かな部族は, 領地を拡げ, 他の部族に勝つだろう。しかし, 時がたつと, 今度はもっとずっと才能に恵まれた他の部族に征服される時がくる。このようにして, 社会的, 道徳的な資質は, ゆっくりと進歩してゆき, やがて世界中に広められるのである」(『人間の由来』191 頁) と。
- 36) 入江重吉『人間観と進化論』晃洋書房, 2005 年, 132 頁, 参照。
- 37) 同上書, 124 頁, 参照。
- 38) 田中雅一「暴力の文化人類学序論」, 田中雅一編『暴力の人類学』京都大学学術出版会, 1998 年, 所収, 参照。
- 39) ヘンリック『文化がヒトを進化させた』今西康子訳, 白揚社, 2019 年, 470-471 頁, 参照。
- 40) ランガム/ピーターソン『男の凶暴性はどこからきたか』山下篤子訳, 三田出版会, 1998 年, 参照; 栗本英世「未開の戦争, 現代の戦争」, 『岩波講座 文化人類学 第6巻 紛争と運動』岩波書店, 1997 年, 所収, 参照。
- 41) 入江重吉『エコロジー思想と現代』昭和堂, 2008 年, 2 頁, 参照。
- 42) 『世界大百科事典』「植民地」の項目, 参照。
- 43) プランテーションの特色としては, (1) 作物は綿花, 葉タバコ, サトウキビ, パイナップル, バナナ, コーヒー, カカオ, ゴム, 茶, キナ, ココヤシ, アブラヤシ, 稲などの熱帯・亜熱帯性作物である, (2) 栽培方法は, 1 種類の作物を大規模に栽培する単一耕作(モノカルチャー)が普通である, (3) 経営形態は植民地の本国などからの企業者による経営で

- あり、広大な土地に巨額の資本を投下し、近代的な設備・機械・技術を用いた資本制大規模農場であるが、労働力は低賃金の現地人や移住民を雇用したものが多かった、(4)産物は本国等へ輸出される輸出商品である(『世界大百科事典』「プランテーション」の項目)。
- 44) 『世界大百科事典』「奴隷貿易」の項目、参照。
- 45) クライブ・ポンティング(『緑の世界史 上』石弘之他訳、朝日新聞社、1994年、316-317頁、参照)は、西欧列強の植民地支配の特徴を、次のようにまとめている。①新たに征服され植民地化された領土は、本国の経済のために、本国ではできない作物の生産のために搾取された。②輸出作物の生産のために肥沃な土地は取り上げられ、それまで作られてきた食糧が輸出作物に取って代わられた。その結果、先住民は不毛の土地に押し込められ、わずかな作物だけしか作れなくなった。③輸出作物は地元農民の小さな耕地ではなく、ヨーロッパ人が所有し支配している大規模なプランテーションで生産された。④作物栽培はヨーロッパの資金と技術ばかりではなく、大量の安価な労働力に依存していた。⑤その地域の人口のわずかな部分を占めるヨーロッパ人は、卑しいと見なしていた肉体労働を地元民に押しつけた。
- 46) ダイヤモンド『銃・病原菌・鉄 上』倉骨彰訳、草思社、2000年、131-132頁、参照。他に、マクニール『疫病と世界史』佐々木昭夫訳、新潮社、1985年、とくに、「第五章 大洋を越えての疾病交換 紀元1500年から1700年まで」、参照。
- 47) ダイヤモンド、同上書、290頁、
- 48) 同上書、292-293頁、参照。
- 49) 同上書、303頁、参照。
- 50) 同上書、310-313頁、参照。
- 51) 同上書、317頁、参照。
- 52) 同上書、313-314頁、参照。
- 53) サーヴィス『文化進化論』松園万亀雄他訳、社会思想社、1977年、58-59頁、参照。
- 54) メスーディ『文化進化論』野中香方子訳、NTT出版、2016年、291-309頁、参照。
- 55) イングルハート『文化的進化論』山崎聖子訳、勁草書房、2019年、参照。とくに、第1章「進化論的近代化と文化的変化」、第2章「西洋諸国、そして世界における脱物質主義的価値観の台頭」など。
- 56) アンジェ編『ダーウィン文化論』佐倉統他訳、産業図書、2004年、とくに第2章「ミームの視点」(スーザン・ブラックモア)など、参照。また、スーザン・ブラックモア『ミーム・マシーンとしての私』垂水雄二訳、草思社、2000年、参照。
- 57) 同上書、第2章「ミームの視点」、とくに36頁、参照。
- 58) スベルベル「文化へのミーム的アプローチに反論する」、同上書、所収、191頁など、参照。
- 59) オドリン=スミー他『ニッチ構築』佐倉統他訳、共立出版、2007年、参照。

参 考 文 献

- アンジェ編『ダーウィン文化論』佐倉統他訳、産業図書、2004年
- 市井三郎『歴史の進歩とはなにか』岩波書店、1971年
- 入江重吉『人間観と進化論』晃洋書房、2005年
- 『エコロジー思想と現代』昭和堂、2008年
- 『ダーウィンと進化思想』昭和堂、2010年
- イングルハート『文化的進化論』山崎聖子訳、勁草書房、2019年
- ウィン「道具とヒトの知性の進化」、バーン／ホワイトウン『マキャベリの知性と心の理論の進化論』藤田和生他訳、ナカニシヤ出版、2004年
- ヴケティツ『進化と知識』入江重吉訳、法政出版、1994年
- オドリン＝スミー他『ニッチ構築』佐倉統他訳、共立出版、2007年
- 川出由己『生物記号論－主体性の生物学』京都大学学術出版会、2006年
- 栗本英世「未開の戦争、現代の戦争」、『岩波講座 文化人類学 第6巻紛争と運動』岩波書店、1997年
- 黒田末寿他『人類の起源と進化』有斐閣、1987年
- 香原志勢『顔と表情の人間学』平凡社、1995年
- コ克蘭他『一万年の進化爆発』古川奈々子訳、日経BP社、2010年
- サーヴィス『文化進化論』松園万亀雄他訳、社会思想社、1977年
- 霜田求「歴史と進歩の観念」、隈元忠敬編『人間論の可能性』昭和堂、所収、1994年
- ズック『私たちは今でも進化しているのか』渡会圭子訳、文藝春秋、2015年
- ステント『進歩の終焉』渡辺格ほか訳、みすず書房、1972年
- スペルベル「文化へのミーム的アプローチに反論する」、アンジェ編『ダーウィン文化論』佐倉統他訳、産業図書、所収、2004年
- ダーウィン『人間の由来』——池田次郎・伊谷純一郎訳『人類の起源』中央公論社、1967年 [1871年]
- ダーウィン『ミミズと土』渡辺弘之訳、平凡社、1994年 [1871年]
- ダイヤモンド『銃・病原菌・鉄 上』倉骨彰訳、草思社、2000年
- 田中雅一「暴力の文化人類学序論」、田中雅一編『暴力の人類学』京都大学学術出版会、1998年
- ダマシオ『進化の意外な順序』高橋洋訳、白揚社、2019年
- チョムスキー『言語と精神』川本茂雄訳、河出書房新社、1980年
- 筑波常治『人類の知的遺産47 ダーウィン』講談社、1983年
- ハンフリー「知の社会的機能」、バーン／ホワイトウン『マキャベリの知性と心の理論の進化論』藤田和生他訳、ナカニシヤ出版、2004年、所収
- ファインバーグ／マラット『意識の進化的起源』鈴木大地訳、勁草書房、2017年
- ブラックモア『ミーム・マシーンとしての私』垂水雄二訳、草思社、2000年

ヘンリック 『文化がヒトを進化させた』 今西康子訳, 白揚社, 2019年

ポラード 『進歩の思想』 舟橋喜恵訳, 紀伊國屋書店, 1971年

ポンティンク 『緑の世界史 上』 石弘之他訳, 朝日新聞社, 1994年

マクニール 『疫病と世界史』 佐々木昭夫訳, 新潮社, 1985年

Miller, G. F.: How Mate Choice Shaped Human Nature: A Review of Sexual Selection and Human Evolution. In: Crawford / Krebs: *Handbook of Evolutionary Psychology*, Lawrence Erlbaum Associates, 1998

ミラー 『恋人選びの心 I, II』 長谷川真理子訳, 岩波書店, 2002年

メスーディ 『文化進化論』 野中香方子訳, NTT出版, 2016年

ランガム／ピーターソン 『男の凶暴性はどこからきたか』 山下篤子訳, 三田出版会, 1998年